

## 工学系大学における教職課程の実践—デューイの教育哲学を参照して—

Practice of Teaching Profession in Technology University  
—from a viewpoint of Philosophy of Education of John Dewey—

加藤聡一（大同大学教養部）

Souichi KATOH: DAIDO University

キーワード：ジョン・デューイ、『民主主義と教育』、成長、オキュペーション、教職課程  
Key Words: John Dewey, "Democracy and Education", growth, occupation, teaching profession

### 1. 工学系大学での教職課程実践

大同大学に赴任して2年になろうとしている。工学部（工業、中高数学）、情報学部（情報システム学科：情報、数学）の教職課程を担当している。

コロナ禍でのオンデマンド授業に悪戦苦闘しつつ、また工学系の学生の状況の把握に努めつつ、1年「教育原理」「教育社会学」、2年後期「教育課程論」、4年「職業指導1・2」（工業科目）を担当し、なるべく学んだことが積みあがっていくように講義を組んでいる。

このとき、デューイ『民主主義と教育』の教育哲学を参照し、講義の内容や課題に教育学的意味づけをもつようにしている。

本稿では、『民主主義と教育』体系より、個人の系として growth 論（「エンジョイ〇〇」と称す）、集団の系としてオキュペーション論を取りあげる。シンポジウムでも指摘されたことを踏まえ、実践するにあたって注意すべき理論的問題をまとめる。

教育実践からは、「教育的信条」と「メッセナゴヤへの参画」を紹介する。

### 2. growth 論（＝「エンジョイ〇〇」）

『民主主義と教育』は体系的に構成されている<sup>1</sup>。そこから、個人の系の成長（growth）として、

衝動（第4章）—興味・関心（第10章）—  
目的（第8章）—職分・職業（第23章）

をひとつながりのものとして取り出せる。これを私は「エンジョイ〇〇」と称している。

「エンジョイ enjoy」を使うのは、これが権利の享受という意味をもつからで、とりつかれていて、また熱中して楽しいという感情に加えて、それが人権の行使、権利の発揮である意味を重ねている。

このひとつながりのうち、

#### 興味・関心—目的

が、通常成長として取り出される。興味を実現しようとしたとき、それが目的になる。そして目的を達成しようとするとき、そこに思考（第11章）が起動する。

この成長の内部に、前提として衝動がある。これは人間本性（human nature）の構成要素、衝動—習慣—知性のうちのひとつだが、衝動が支えてこそ、その興味・関心は、その人自身のものとなる。

目的がさらに発展すると、職業になる。職業は、興味・関心であり、また目的なのである。第23章においては、大まかに calling と vocation を区別している。calling を松野は職分と訳していて、その訳語が適切かどうかは問題にすべきであるにしても、これは、実際に稼いでいる職業とは何か別のものを職分として区別している。

興味・関心＝目的が発展したものととらえると、大学での専門とかなり高度な趣味が職分に相当する。専門で、例えば建築で食べていければそれは職業となる。

この一連の成長＝「エンジョイ〇〇」が育つようにするのが教育であるともいえよう。

中学生高校生の生徒を理解するとき、学力や「問題」行動だけでなく、一人一人の「エンジョイ〇〇」をはぐくみ、職業にまで、やりたいこととして伸びていくようにするのが

教育の仕事になるし、教職の学生自身が、教職を職業にするにあたって、そこに自分の「エンジョイ○○」を自覚し活かそうとすることが教職課程の実践の軸になると考えている。

具体的な場では、「事例検討」「事例研究」をする場合、その事例の生徒を「のっぺらぼう」ととらえるのではなく、どういう生徒か、どういう「エンジョイ○○」を持っている生徒なのか、との生徒理解の視点を持って考察するようになってほしいと考えている。

### 3.オキュペーション論

デューイ哲学でオキュペーションは重要な概念である。まずは、心が何かに占められている (occupied) 活動の質を意味する。次に『学校と社会』で、述べられているように、オキュペーションは、金工、木工、料理等々の「活動」「作業」「仕事」をする集団、共同体、社会として規定される。内部に、共通の目的、仲間、手段などの要素を含む。デューイは、学校でのオキュペーションを、実社会 (large society) に育てることを課題とした。実社会から見れば学校での作業は、胎芽的社会 embryonic society なのである。

この共同体の発展は、少し狭い意味では、『民主主義と教育』の第 15 章から第 17 章で扱われている。

学校やクラスが、やりたいことをやっている集団なのか、一人一人の「エンジョイ○○」を発揮しているのか、ということが生徒理解、生徒指導の基本となる。

クラスの学級目標のありようを、日本レベルだと日本国憲法、世界レベルだと国連憲章につながっていくようにとらえるかどうかである。

### 4.growth 論とオキュペーション論

オキュペーションが職業と訳されることもあることは、個人の系としての熱中する活動と、社会の系としての大きな社会の 2 つの系をつないでいる概念であることも理解される。

両者は、以下の民主的基準と望まれる変化の記述で統一的に理解できる。

「民主的基準」は、社会をはかる尺度、望ましい諸特徴として、第 7 章で導出される。

意識的に共有している関心が、どれほど多く、また多様であるか、そして、他の種類の集団との相互作用が、どれほど充実し、自由であるか<sup>2</sup>

「関心」の相互作用と共有がされるほど、その活動はオキュペーションの質を帯びていく。フレーベルの「子どもの園」の例えでいえば、1 つ 1 つの花の成長が育まれる花園がオキュペーションといえようか。

そして、前述の職分と職業が扱われた第 23 章では「望まれる変化」として以下の記述がある。

望まれる変化の意味を形式的表現ではっきり示すことは難しいことではない。それは、あらゆる人が、他の人々の生活を一そう生き甲斐のあるものとするような仕事に従事 (be occupied) しており、したがって、人々を結びつけて一緒にする絆が一そうはっきりと現われる一人々の間の隔ての柵をとりこわす一ような、そういう社会を意味するのである。それは、各人が自分の仕事に対してもっている興味が、強制されたものでなく、理知的なものであるような事態、すなわち、各人の仕事が彼自身の適性 aptitudes に合っていることに基づいているような事態を意味しているのである。<sup>3</sup>

ここにおいて、形式的にせよ、『民主主義と教育』で目指される社会、教育哲学の目的が具体的に示されている。そして、学校は、職業を含む外の実社会とどれだけコミュニケーションし、つなげられるかの方向性が明示されている。

### 5.実践紹介①—「教育的信条」の更新

赴任 1 年目より、はじめての私の講義で、最後にレポートとして「教育的信条 (自己アピール)」を作成してもらい、そのあとの私の講義では、その期の講義で学んだことを取り入れつつ、「更新」していくレポートにしている。当初「自己アピール」としたのは、赴任直後で読んだ 4 年生の教員採用用のエントリーシートで、書き込む内容に不安を感じたため、採用試験前に採用試験用に作るのではなく、1 年生の時から学んだことを織り込

み、自己吟味を重ね、また、地域の教育方針・教育委員会の方針の理解を組み込んで、面接や小論文に活かせる素材を積み上げていこうと考えた。もちろん、教採用だけでなく、現場に立った時、やりたい教育をやり始めることが目的である。どういうクラスにしたいかは、担任を持った時の「学級開き」の時の話につながることを期待している。

内容は、A、B、C 列に加えて、2 年目後期からは冒頭で各自の「エンジョイ〇〇」の整理と現状をまとめる欄をつくった。

#### A 列 自己アピールの素・教育構想

この A 列の部分で 4,000 字以上。オンデマンド課題の Form 書込みや各自の「書きため」ファイルの文章を活用する。自分の言葉を使いつつ、B 列に根拠を持つようにする。単元など具体例を入れていく。教採用前では、教育実習の経験が書き込まれる。また、全体に学生の「エンジョイ〇〇」が発揮されるように考える。

A 列の項目は、以下のように立てた。

- 0 なりたい教師像
- 1 やりたい授業
- 2 クラス
- 3 学校・地域
- 4 その他

授業とクラスづくりを意識することが 1 年では精いっぱいのものであるが、2 年「教育課程論」では、特活や道徳、総合的な学習の時間など、教育課程全体に視野が広がる。特に 3 の地域学校協働が新しい方向で学生に経験がないようで、これを講義で埋めつつ、1 年「教育社会学」で、世界・日本・地域の問題を扱い、学校から視野を広げる。2 年「教育課程論」では、記述が具体的になってくる。書きにくい弱い部分は、教育実習の時現場を見てくる視点になる。

#### B 列 教職の学びとの対応

左の A 列に対応する、「教育原理」など（テキストプリント動画）で学んだキーワード、フレーズを書く。A 列の対応する記述のちょうど右側に書く。講義を聴いていたことをあからさまに示すことを指示している。

ここで、教職で学んだことを明示し、その「活用」の視点で、A 列の構想をとらえ返していくことになる。B 列の記述が弱いと、

「思いで学ばざれば」になる。

ちなみに、1 年後期で、教採用の『教職教養の要点理解』（時事通信社）をテキスト指定して使い始める。学問的に使用している。学問体系と採用試験用の章立てはちがうので、見るべきページを指定している。講義で取り上げた順で読んだり、不足分を自分で補って調べたりする学生も出てきている。

#### C 列 A 列を自分がやれる経験的根拠

これまでの高校（以降）の経験で対応するものを具体的に書く。専門やゼミ・卒研、課外活動・社会的活動での学びを忘れずに書く。1 年次は高校での経験が書かれるが、段々と、大学での活動が書かれていくことを期待している。いわゆる「ガクチカ（大学時代最も力を入れたことは?）」の素材でもある。

日々の学修が、書きためられ、構造的に「教育的信条」に組み込んでいくことで自ら課題を探し、自ら学ぶ学生になっていくツールになっていくことを期待している。その意味では「教職履修カルテ」と連動している。

「エンジョイ〇〇」との関係では、A 列で書いたことが本当にやりたいことなのか、その準備を取りつかれた活動として C 列に書いているかなどが課題となる。

新学習指導要領の資質・能力の「3 つの柱」との関係でいえば、B 列が知識・技能、A 列がそれを使う思考力・判断力・表現力等、そして C 列が、社会や自分の人生と関係づける学びに向かう力・人間性の涵養に大まかに対応する。教職の学生が、教職を含む大学生活において、3 つの資質・能力をつけていくことで、次世代の中学生高校生に、知識だけでなく、それを学んで何ができるのか、社会や人生にとってどんな意味をもつか—を語れる、授業・クラスづくりができる教師に進んでいくことが期待できる。

「エンジョイ〇〇」として工業などの専門が学生の人生に入り、授業実践などの根拠になってほしいが、趣味的なものがあげやすいようで、それならば「2 次的方向づけ」として（第 3 章）趣味から発展させて教職の実力につなげる指導を強めないといけない。

教育では、個人の経験の自己吟味が避けられない。「教育的信条」も、面接で使うよう



な公共的表現ができるようになっていくことに腐心している。A 列の内容自体は、個人的経験を含むのであれば、「評定」しない。B 列と、A 列との関係を「採点」している。個人的なことは自分の個人的なファイルに保存しておいて、課題としては提出しないという判断力をつけていく必要がある。3 年生では、人に読んでもらえる形で「教育的信条」をつくり、グループ活動で交流できる力まではつけたい。

4,000 字以上の記述部分は、Word のディクテーション機能の紹介のほか、日ごろの課題でつくった文章を使ってやるようにしているので、書けない学生はほとんどいない。B 列があるため、長く書けば単位が取れるという誤解も生まれにくい。1 年後期「教育社会学」にして、記述が膨大になる学生が多数で、たくさん書く段階から、視点を作って「選ぶ」「精選する」段階に進める学生も多い。

2 年「教育課程論」では、「教育的信条」から「マイ＝カリキュラム」を作成する。興味を目的・目標（アイデア）に転換し、現実から理想に、経験をつないでいくことをカリキュラムと定義している。教師になりたいという興味を、具体的な目的に変換し、教育実習までに、そして卒業までに何をやっていけばいいか、スケジュールのイメージを持つことがねらいである。現実的に考えるがゆえに、教職をやめようと考えてしまう学生もいる。現象的には教職への意欲が弱まったように見える場合があり、ここへの指導・励ましも必要である。基本は、できなかったらどうしよう、ではなく、どうやっていくか、自分の計画（マイ＝カリキュラム）を立てること、教師への志望も漠然とではなく具体的にもつことが大事で、「教育的信条」の更新はその基礎作業になるだろう。

なお、今年度新しく担当した「職業指導 1・2」（工業科目）は、私の講義を受けるのははじめての学年で、これまでの「教育的信条」の積み上げはなかったが、職業指導の参考具体例として、「教育的信条」を書いて、面接の練習にも活かせるようにした。ほとんどの学生は、教採対策というより、「教育的信条」を書くことで、そもそもの、教師を目指す意思を再確認した形であった。「職業指導」受講者からは、愛知県公立高校工業

に、3 名は合格者が出た。もちろん学生自身の頑張りによるが、昨年度や中学校受験者の状況を考えると、かなりの「有効性」があったといえる。昨年度は、課題でなく、任意の提出にしていたところ、提出者がいなかった。課題として出してあげればよかった。

## 6.実践紹介②—メッセナゴヤへの参画

メッセナゴヤは、毎年開催の業界の交流展示会で、2022 年はオンライン展示会がひと月ほどあり、11 月 16 日（水）～18 日（金）の 3 日間、リアルとして、名古屋市国際展示場ポートメッセなごやで開催された。電車広告で初めて知り、またオンライン展示会があることも分かったので、「教育社会学」で課題として出した。他の授業の学生にも推奨したが、一部学生が今年は自己責任でリアルに行ったほかは、案内が遅いせいもあってそんなに積極的な参加はなかった。

「教育社会学」では、オンデマンドの課題として、オンライン展示会を見に行くよう指示した。ログインの仕方がわからない学生もいたので、対面授業時に、ログインし、グループで課題（見て気づいて考えたこと）の共有を図った。ホームページでは、出展会社の一覧性が弱く、わかりにくかったという学生も多かった。対面授業で、私がリアルでもらってきた案内図や商品を示し、興味を持ってもらえるようにした。

商品交流の場だけでなく、就活の学生のコーナーもあり、本学で企業を大学に来ていただいての「業界研究会」の大きな規模にした場でもあった。

愛知の大学では、名城大学と中部大学がブースを出していた。

来年度以降、どの学年でもその段階にあわせた視点を深めつつ、課題として参加させたい。また、教師になった卒業生が高校生を「連れていく」場にもしたいと考える。

今年の参加視点については、以下のように案内した。

### 【ご案内】メッセナゴヤ 2022

- ①愛知の産業界の状況 中学生高校生大学生がこの世界に入っていく
- ②現実の社会（会社）では、どういう問題に挑み、「エンジョイ〇〇」をどう発揮しているか
- ③自分（社員）の「エンジョイ〇〇」をど

う発揮できるか、自分の「問題」がどう挑まれているか

「卒研」につながる手がかりはあるか

- ④ 中学高校でやれる教育を考える刺激—中学高校の教材研究、教材の発展形、コネ（授業ゲスト）、高校生の就活・就職先
- ⑤ 自分の就活・就職先さがし

## 7. メッセナゴヤのオキュペーションとしての意義

メッセナゴヤへの参画の意義だが、オキュペーションは本学にかかわって、以下のように、大きな社会へ胎芽的、また、職業へ衝動の順に並べられる（それぞれ大まかに上～下の対応）。

実社会 企業、行政 グループホーム  
学年会  
メッセナゴヤ  
卒研ゼミ  
教育実習 クラスの把握（「座席表」）  
業界研究会  
Team のグループ  
オープンキャンパス  
学年  
クラス、部活、委員会、総合的な学習／探究の時間  
泥・水・砂あそび 土山（保育園）

教職としては、現場で、あるいは教育実習で〈クラス〉づくりをするとき、クラスがオキュペーションになるよう、各人のやりたいこと、共通の目的、役割分担などを豊かにしていくことと、そのために「座席表」もしくは自分のノートをつくって、日々、生徒の「エンジョイ〇〇」をわかったところから書きためていく生徒理解をはかることが教師の基礎的实力として求められる。

そのためにも、教職の学生が自分の所属する集団や共同体を豊かに持ち、そこで生活していく経験が重要である。大学も中学や高校と同じ「学校」なのである。

ひとつながりのオキュペーションとして見る視点があれば、例えば「オープンキャンパス」からも中高の教育に活かせる多くのことを学べるし、学園祭に「とりつかれて」いる学生もそこでの経験を自分の進路や将来の中学校高校の活動に〈連続的に〉活かしていけるのである。

メッセナゴヤは、現実の産業界の産業活動の場でもあり、それらの会社群とのコネクションを作る場でもある。つまり、現実から学べるオキュペーションであると同時に、未来への確かな準備ともなっているオキュペーションだという意義がある。大学と産業界を結ぶとともに、教職の学生を介して、中学生高校生と産業界を結ぶ機会でもある。

このような場とのかかわりは、自分でも探して行けばよい。トヨタ産業記念館など、産業関係の施設は多い。学科の研究室も様々な企業や施設と豊かな関係また世代的な関係がある。ナゴヤメッセは、そういうコネクションをつくっていくための「練習」や「ガイドブック」の役割を果たしている。工業高校などで、社会見学に行く予行練習でもある。

## 8. 実践の中で分かってきたこと

「エンジョイ〇〇」のひとつながりの流れ図とこの間の学生の様子から、現代学校教育の問題点が見えてきた。

一つは、熱中していることの内部に「衝動」がないこと。もう一つは、卒業後の大きな世界と（特に入学試験によって）分断されていることである。

自分の中に根拠がなく、未来とつながっていない状態—そこに「学校」があることが問題なのではないかということである。

「教育社会学」では、どうするか、の前に、状況をよく調べること、教職の学びと関連づけること（法や制度）を学んでもらった。そして、問題を解決するためには、自分や仲間のなかに、どんな「エンジョイ〇〇」が育っているのかをよく知ろうとし、それがどう発揮されれば、問題の解決につながるのか考えることが重要だと学んだ。

「エンジョイ〇〇」の「不在」こそ「問題」なのではないか。保育園で土山を崩して、泥・水・砂で何日も熱中して遊んだ時の衝動や興味はどこへいつてしまったのだろう。土山でのあそびが未来の職分や職業の「土木工事」につながっているのかどうか。

内部に根拠がなく未来ともつながっていない状態は、自我が不安定になる環境であり、「自我防衛機制」が発動する。攻撃的になる原因の一つはこのような環境なのかもしれない。

教職を志望する根底に自分の衝動がなければ

ば、つらいことがあれば先に進みにくくなる。メッセナゴヤなど通じて産業界のことがわからなければ、高校生に何を語るというのだろう。教職志望なのに、メッセナゴヤやトヨタ産業記念館、産業文化遺産などに「行きたがらない」学生が複数いることに驚いている。

逆に、メッセナゴヤで何かをつかんだ学生もいる。自分の中の衝動を見ることで、卒研への道筋が見えてきた学生もいる。

### 9.開放制の教員養成

「エンジョイ〇〇」を出し合って作業する中、「エンジョイ〇〇」は 1 本でしかも固定的なものだと考える「誤解」がみえてきた。

興味・関心は、複数かつ多数持っている。また、一瞬の衝動で消える場合もあるし、浮いたり沈んだりしながら、職業の軸にまで育つ興味もある。複数の興味が、生まれたり消えたり、相互に影響しあったりしていくのである。フレネは「興味はもらったりあげたりできる」と言ったという。ほかの人の興味をもらって友だちより夢中になることもあれば、数学が嫌いな生徒に、数学大好きな教師が数学への興味をわけてあげることもある。

ある一つの興味も形を変えたり、方向を変えたりする。

アイドルグループに熱中して、「エンジョイアイドル」の人も、推しメンだけでなくメンバー一人一人のエピソードを知ったり、メンバー同士の励ましあい方を知ったり、あるいは親との関係を様々に知ったりできる。そのアイドルが出演しているコマーシャルを通じて、日本の産業の方向を考えることもできる—これらは、生徒理解、クラスづくり、保護者との関係づくり、教材研究などの「教職の実力」（エンジョイ教職）につながらないだろうか。「教職の授業」を受けてゼロから積み上げるだけでなく、もう学生自身が「エンジョイ〇〇」として持っている力を活かしていけないだろうか。これまでとはかなりちがった教育が生まれてこないであろうか。そしてそれは教師自身もやりたくてやる教育なのである。

エンジョイ建築など、大同大学だからこそ大きく育つことが学生の中にないだろうか。

それが卒研になり、活躍できる企業に就職するのも「幸せ」だろう。開放制の教員養成は、「教員志望第一」の学生のための制度ではない。教師の根底の力が、中学校や高校を楽しくする力（エンジョイ学校）だとすれば、大学という学校を楽しくする経験こそが、エンジョイ学校の力を育む。

逆説的なようだが、教員志望者に狭くするのでなく、大学生生活全体を楽しむ学生が教職を履修し、その中から教職を目指す学生が（迷いながら考えながら）出てくる方が、「教員」は増えていくように思える。

また、教師の道を選ばないのも人生選択だが、その場合でも、エンジョイ教職は形を変えて、中学生や高校生との新しい地域での関わり、そしてその学生自身の人生を豊かにしていくのではないか。

「教育的信条」は、その都度ゼロから作るのではなく、前に書いたものを書き直していく。2 年「教育課程論」の「教育的信条」で、1 年前に「教育原理」で扱った「ヘルバルト学派」を書いていたものがあった。「教育課程論」で、カリキュラムの類型は、生徒の主体のあり方と、教育内容の肥大化との戦いである旨話したが、時間がなくて駆け足だった。ところが、1 年前の自分の「教育的信条」の書き込みをヒントに、自分でカリキュラムの類型を深めたものがあった。過去の自分の書いた記述に支えられて、自らの学びが進んでいるように感じる。

本稿でとりあげた『民主主義と教育』の哲学も、詳細にこれだけをやっているわけではもちろんない。学べる教育者はたくさんいる。デューイ哲学自体も自らの「教育的信条」の根拠として、時間をかけて、講義と並行して、また卒業後も少しずつ学び続けてほしい。

### 文献

1. 日本デューイ学会編『民主主義と教育の再創造 デューイ研究の未来へ』（勁草書房、2020 年）、311 頁。
2. デューイ（松野安男訳）『民主主義と教育』（上・下）（岩波書店、1975 年）、上巻 136 頁。
3. 同上、下巻 184 頁。